日本における新しい性教育・純潔教育をいかに構築するか

石﨑淳一（神戸学院大学）

【日本の性をめぐる状況と性教育】

1990 年代を通して日本人の性行動は劇的に変化した。それは一言でいえば、社会的な「性の解放化」「フリーセックス化」であった。90 年代の後半から日本で大規模な性行動調査を実施した京大の木原らの研究グループは、性交開始年齢の低年齢化や性関係のネットワーク化などを実証し、日本の「社会的な病理」を指摘した。そして、疫学的な立場からこのままでは HIV/AIDS の感染拡大は避けられないと警告している。多くの日本人はこのようなフリーセックス化を文化的な異常事態であると明確には認識していないようだが、いわば宇宙の原理原則に反するこうした行動は、身体的な側面で性感染症の流行という明白な問題を引き起こしている。そのため、宗教家、政治家、教育関係者のこの問題に対する危機感はあまり見られないが、産婦人科を中心とする医師たちの危機感はひじょうに深刻なものとなっている。この点で、現代社会における性の問題は、医療的あるいは保健科学、健康科学的な側面をもっている。

一方この間、日本の教育現場における性教育は従来の避妊教育の枠組みで展開され、欧米で実施されていたコンドームの普及をはかる「コンドーム教育」が推進されたため、教育現場に混乱を招いた。さらに左翼の教育学者や教員組織が、家族愛を否定し家族を解体しようとする共産主義思想に基づく性教育を浸透させた。すなわち、子どもに性的な知識を「権利」として伝達しようとする「過激な性教育」や男女の性差を否定する「ジェンダーフリー教育」などが実施されたため、日本の性教育は「反教育」のようになってしまった。そして、90 年代の終わりにはジェンダーフリー思想と結びついた男女共同参画社会基本法が制定された。このように 90 年代は日本の性をめぐる社会・教育状況が著しく悪化した時代であり、そうした異常な社会状況を象徴するものとして「援助交際（エンコー）」の出現を挙げることができるだろう。

その後の 2000 年代には、ジェンダーフリー思想や「過激な性教育」に対する学術的、社会的な批判が起こり、性教育の見直しが行われた。しかし、実際に「どのような（内容）」性教育を「どのように（形式）」「誰が」行っていくべきか、ということに関しては、まだ不確定な状態にある。そして、90 年代以降の性の解放化は、日本における家族の解体と社会的共同体の解体を招いていると考えられるが、この点に関する学術的、社会的な検討と対応はまだほとんど見られない。これは現代日本において性に関する価値観が空白状態であることを反映していると考えられる。現在、日本社会では伝統的な性道徳や性倫理のもつ内的な拘束力がひじょうに低下しているため、性教育において精神的、道徳的な次元の教育を行うことはきわめて困難な状況にある。

【米国の Abstinence Education（A.E.）】

米国においては、日本と対照的に 90 年代を通して広く展開されてきたのが、「Abstinence

Education（A.E.）」である。Abstinence は、「禁欲」を意味する言葉で、禁酒や禁煙なども Abstinence である。しかし、一般的にA.E.は「Sex Education」に対置される言葉として使用され、「(性的) 自己抑制教育」などと訳されている。演者は「性的自律教育」と訳すこともあるが、これは自己管理（セルフコントロール）という意味を込めているためである。これまでに数多くの A.E.プログラムが開発されているが、その主要なメッセージは以下の３点である。①青年期における性的自己抑制には、人格成長のための大きな意義（メリット）がある。②HIV/AIDS を含む性感染症は深刻な医学的、社会的脅威であり、青少年は特にそのリスクが高い。したがって、③できるだけ結婚まで性的な活動を控えるのが青年期の性におけるベストの選択である。米国では 90 年代以降、公教育における「人格教育（Character Education)」の基盤の上に民間において A.E.が開発され、政府によって支援されてきた。A.E にはキリスト教の影響が大きいが、公衆衛生学的な科学的エビデンスにも支持されている。日本ではこれまで A.E.に関する研究はほとんど行われていないが、演者は日本型 A.E.の構築が必要であると考えてきた。

【日本での A.E.の試み―大学生による高校生へのピア教育】

１）対象 : A 公立高校の３年生全員。８クラスに所属する 273 名（男子 114 名、女子 159 名)。

２）方法：大学生４名が、A.E.のプレゼンテーションをオムニバスで実施。各プレゼンの後に４つの小グループに分けてグループ・ディスカッションを実施。２クラス約 60 名を合同で２時限(100 分)のプログラム。４つのプレゼンの題目は以下の通り。「世界と日本の HIV/AIDS の現状」「責任ある行動を（性感染症)」「父母の愛」「男女が親しくなるということ」。

３）高校の位置づけ :「家庭総合」（家庭科）の授業の「青年期のライフサイクルの課題」に関連づけられた。

４）評価：性の「知識、行動、意識」に関する質問紙調査をピア介入の実施前後に行った。

５）結果：質問紙の主な結果は、次の通り。①知識：８項目の性感染症などの知識を問う質問において、全般的にかなり高い正答率となった。②行動：性交の経験率は全国調査と同じような結果であった。③意識：「高校生の性交」「不特定多数との性交」などの性意識において、ピア授業後により否定的な方向への変化を認めた。④クロス集計：喫煙と性行動という複数のリスク行動の関連を確認した。性行動と性意識との間には、はっきりとした関連を認めなかった。

６）まとめ：大学生のピア授業によって性感染症の知識が向上し、性意識には抑制的な方向への変化がみられた。また、授業を受けた高校生、授業を実施した大学生、さらに教員からもピア授業の意義が高く評価された。今後、人間のライフサイクルにおける「性」のもつ意味と青年期の性的自己抑制の意義を多面的に検討し、それを明確に伝える新しい性教育・純潔教育プログラムの構築を進めることが重要であると考える。

【参考文献】

石﨑淳一（2005）「青少年の性的活動における危機をめぐって」. 臨床心理学, Vol. ５.
石崎淳一（2007）「『人格教育』と性的自己抑制教育（AE）の試み」. 世界平和研究, Vol. 173.
加久はつ・中山尚夫・石﨑淳一（2007）『人間性教育読本―愛と性の尊厳』. アートヴィレッジ.